

公開講演会要旨

国民性の国際比較

— 計量的文明論の構築へむけて —

統計数理研究所 名誉教授 林 知己 夫

(1999 年 11 月 2 日, 統計数理研究所 講堂)

日本人の国民性研究を始めて以来 45 年を超え、この結果の一端は、坂元・中村両教授によって述べられた。これによって、変わらないもの、変わったもの、また、その変化する姿が明らかになった。日本人の国民性を知る上でもこれだけでは不十分で、外から日本人を見る必要がある。このためには意識の国際比較を通して日本人のみならず外国人の国民性もしくは民族性を知ることが大事になる。これを目標として、国際比較研究を行わなくてはならなくなる。国際比較のためには、暗黙に了解されていたことを明確に規定することから始めるのが的確である。まず、国民性の定義である。ものの考え方、見方、感じ方 (Belief Systems, The Way of Thinking and Sentiments) の国もしくは民族の集団特性 (Collective Characteristics) を国民性と定義する。これをさまざまな角度から調査し比較することになる。このためには、対象諸国の調査での比較可能性を第一に考える必要がある。これは、取り上げる対象国 (民族) の選定から始まり調査票の構成の問題も次に大事な点となる。質問には各国固有の性格があることを承知し、これらをいかに組み合わせて質問票にするかという測定システムの構築を研究しなければならない。そこで、連鎖的比較調査分析法 (Cultural Link Analysis, CLA と略称) を開発した。これは比較すべき対象の決定、質問票の決定とデータ収集のあり方、データの質の評価とデータの分析に及ぶものである。こうしてでてきたデータを隅々まで分析し尽し、対象の似ているところ、異なっているところ、どのような点で同じであり、どのような点で異なるかを明らかにする。また、対象の選定において日系人は大事である。日系に残っているところが「日本的なもの」と言えるからである。こうして、日本、アメリカ、イギリス、オランダ、ドイツ、フランス、イタリアと日系人 (ハワイ、アメリカ西海岸、ブラジル) について調査を行った。これらの調査から浮かび出してきた日本人の国民性の普遍性と特殊性を述べた。こうした経験から今後の国民性研究の将来像が見えてきた。これは、計量的方法による文明論の構築へ向けての研究である。これは、単に研究のみの範囲にとどまるものではなく、国際相互理解のための鍵となる情報を与えるものである。こうしたことは、これまでの成果を延長するだけでできるものではない。新しい方法論の開発を進めることが大事である。これは CLA とデータを通して何が見えてくるかを追求するデータの科学 (Data Science, DS と略称する) を合わせた CLADS の展開である。これを理論的、実践的に押し進めることは統計数理による世界平和への貢献と考えている。